

連歌論集二

二〇

木藤才藏校注

連歌論集

二

江蘇工業學院圖書館
藏書章

中世の文学
三弥井書店刊

連歌論集(三)

中世の文学
第一期第十二回配本

定価 六八〇〇円

昭和六〇年七月一〇日 初版第一刷発行

©校注者 木 藤 才 藏

発行者 吉 田 栄 治

製版所 第 二 整 版

東京都港区三田三一二一六

発行所 株式会社 三 弥 井 書 店

電話東京(〇三)四五一一九五四〇
振替口座 東京九一二二二五番

目次

解説	三
凡例	四
初心求詠集	四
花能万賀喜	六
田舎への状	一〇
密伝抄	一〇
砌塵抄	一五
かたはし	一七
筆のすさび	一八
ささめごと―改編本―	一七
所々返答	一五
ひとりごと	一五
心敬有伯への返事	三一
岩橋跋文	三九

引用句索引	三三
心敬法印庭訓	三六
老のくりごと	三六
私用抄	三三

解 説

初心求詠集

〔構成・内容〕 最初に連歌の功德と本書執筆の経緯を述べて序とし、ついで、「連歌は言葉かゝりをもととして、心を求むる事なかれ」以下、二十三項目にわたって、連歌の心あて・連歌の点・器用と数寄・請てには掛てには・秀句・連歌の諸体・発句・脇句・執筆その他、連歌の作法・心構え等について説いているほか、良基の師綱・成阿・通郷・道助評や三賢に関する逸話などについて述べた上で、最後に、連歌の略史と三賢の遺風を残しとどめていた梵灯が没して、その追善の二百韻を詠んだことを記して跋としている。

〔成立〕 連歌合集本の序文によれば、成仏院の久阿の求めに応じて、その師梵灯の教えを書き記して与えたものである。成立年次は、跋文の記事によって、梵灯の没した翌年ということになる。梵灯の没年に関しては、金子金治郎氏が説かれたように、『梵灯庵主返答書』を著した応永二十四年（一四一七）以後、足利義教による北野社法衆一日一万句連歌の張行された永享五年（一四三三）以前ということになる。

〔諸本〕 底本と校合本につき簡単な解説を加えておく。

1、書陵部蔵鷹司本（鷹、九四）

袋綴一冊。縦二七・六センチ、横二一センチ。表紙左肩に、うちつけ書きで、

初心求詠集 广仁奥書

完

と記す。第一丁表から本文。第一丁から第四丁までの表の右上隅、第一、二丁の表左下隅、第一丁表の左上隅、その裏の左上隅と右下隅を破損しているため、本文の一部が欠けている。巻末に奥書はなく、改丁して、「一、こそ付の事」以下二十三項を記し、そのあとに、

初心求詠集又おくの一帖も宗砌作云々

各別にありといへともおなしくとち加也

応仁元年十二月十八日 書写畢

と記す。二十八、九字以上の脱文が三か所ほどある。本書の底本に使用。『連歌貴重文献集成 第三集』に、その影印と解説を収む。

2、京都大学国語学国文学研究室蔵原文庫本（コ、Gb、14）

袋綴一冊。縦二六・七センチ、横一九・五センチ。表紙左寄りに、うちつけ書きで、「連歌求詠書」と記す。第一丁表から本文。内題なし。巻末に奥書がなく、「一、こそ付の事」以下二十三項を記し、そのあとに、「一、吉野国栖」云々以下五十九項を記したあとに、「文明三年六月 日」とある。鷹司本に見られる前記三か所の脱文を共有している。室町中期の古写本で、鷹司本にたいへん近い本文を有する。

3、京都大学附属図書館蔵平松本（平松、七、ヨ）

「淀渡並連歌俳諧ノ事」二冊のうち。袋綴一冊。仮表紙。縦二六・六センチ、横一六・七センチ。外題なし。室町末期写本。「面の連歌に」云々の項の中期より前と、連歌の略史を記した部分の「やらんたゝ御あらましのみにて」以下の部分を欠く。巻首の部分は欠落していて比較できないが、それ以後の部分では鷹司本に見られる脱文二か所を共有している。本文は鷹司本にくらべていくらか異同がある。

4、国会図書館蔵連歌合集第十九集本（わ911.2、11、9）

袋綴一冊。縦一三・七センチ、横一九・五センチ。本文の初めに「初心求詠集」とあり、江戸初期写本。序文について、二十六項（鷹司本の「或は下手或は初心の人」云々の項、「連歌に三の時節あるへし」云々の項、「点の事」云々の項がそれぞれ二項になっている）のあとに跋文があつて、そのあとに、

此一帖御所望依難去録之、但雖非下愚今案上手先達詞也、所願者^{（て）}発明之人是所嫌者末練之輩口遊也、所詮讃謗共以可無益、御披見已後則拋万火一時被成灰塵者、頗為本望了

千時文安六年七月十二日録之

宗砌作

とある。鷹司本や頼原本との間に異同が多く、平松本とも相当本文を異にする。他の三本とは別の系統に属する写本と見てよい。誤脱は極めて少ない。

なお、金子金治郎著『新撰菟玖波集の研究』（昭和四十四年風間書房刊）に、本書の成立その他に関する詳細な考察が収められている。

花能万賀喜

〔内容・成立〕 最初に連歌の諸体に通すべきことと本書著作の趣旨を説いて序とし、ついで、救済二十二句、良阿十四句、周阿六句、梵灯三句、宗砌二句、総計四十七句の付句を掲げて短評を加え、連歌の諸種の姿や付様の呼吸を知らしめようと意図したものである。救済の句について良阿の句を多く掲げているのは、その作風の形成に、この二人の先達の作風が大きな影響を与えていることを物語るもので、宗祇が『吾妻問答』で、宗砌について、「救済・良阿が風骨を移して中古の風情を捨て侍るにや」と記しているのを、裏づけるものである。

本書成立の年次に関しては、統群書類従本その他の奥書によって、大和国のある少年の求めに応じて、享徳元年

(一四五二) 十月に執筆したものであることがわかる。

〔諸本〕 底本と校合本につき簡単な解説を加えておく。

1、国会図書館蔵連歌合集第十九集本（わ^{911,2} 11、9）

先に掲げた『初心求詠集』と同じく、連歌合集第十九集に収められている。江戸初期の写本で、諸本の中での最善本である。内題・外題ともになく、巻末に、「此一巻は去々年九月比」云々の奥書がある。享徳元年大和国の少年に書き与えた本が流布した後、専順によって転写されたものに宗砌が享徳三年八月に奥書を加えたのが、この本の祖本ということになる。本書の底本に使用。『連歌貴重文献集成 第三集』に、その影印と解説を収む。

2、早稲田大学附属図書館蔵本

『古今和歌集灌頂口伝』に付載。列帖装二冊。縦二六・五センチ、横二一センチ。下冊の第四十八丁表から第五十七丁裏まで、『花能万賀喜』。巻末に奥書を有しない。室町時代古写本。連歌合集第十九集所収本に近い本文を有する。

3、京都大学国語学国文学研究室蔵本（コ、Gb、73）

袋綴一冊。縦二四・六センチ、横一八センチ。『薄花桜』その他と合綴。仮表紙の左肩にペンで、また、第一丁表の本文の前に本文と同筆で、「連歌秘要集」と記す。江戸中期の写本。目録には、「宗砌連歌大要」とあるが、本文の前には内題はない。巻末に、

享徳初年神無月、和州より或少人連歌のみち心得侍へき様書付よと承ほとに、筆案なんともおよはす、傍にて見付侍此料紙を享徳三年七月写之 宗砌作也

とある。第十九集所収本との間に相当の異同があり、明らかに脱落と認められるものや、順序が違っている部分があつて善本とはいえない。

4、国会図書館蔵連歌合集第二集本（WA¹⁶、94、2）

袋綴一冊。縦一九・九センチ、横一五・三センチ。江戸初期写本。『連歌延徳抄』その他と合綴。外題も内題もない。巻末に京大國語學國文學研究室本と同様の奥書を有し、脱落と認められる箇所や順序を異にする部分を共有し、本文も極めて近い関係にある。

5、統群書類従原本（四五三、二）

書陵部蔵本。『馬上集』と合綴。巻末に、

享徳初の年神無月の比、大和国より或少人、連歌の道心得侍へきやうを書付てと承程に、草案などにもおよはす、かたはらにみへけ侍る此料紙を取てかやうにしるし、かの所望にしたかひ侍る。いかにそや。宗砌在判とある。第十九集所収本に極めて近い本文を有する。

なお、本書の本文・成立等に関しては、金子金治郎著『新撰菟玖波集の研究』に詳しい考察がなされている。

宗砌田舎への状

〔内容・成立〕 田舎人の質問に対して、らん留のこと・切れる句と切れない句・重詞等について記したものである。てにをはの用い方についての論が中心を占めている。

成立の年次については、文安五年二月五日の句、「花はひも柳は髪を時津風」を、「先年愚身発句に」として引用していること、また文中に、「今は愁に役を拘候」と記していることにより、宗匠在任中の書状であると推定される。したがって、文安六年（一四四九）以後、宗匠を辞任した享徳三年（一四五四）十一月以前の成立ということになる。

〔諸本〕

底本および校合本について簡単に解説を加えておく。

1、書陵部蔵桂宮本（四五七・一七八）

卷子一軸。紙高一七・六センチ。『連歌仕用卷』と同じ箱に収む。題簽に、「宗砌田舎状」とあって、内題はない。

巻末に、「此」巻以玄仍本心前筆令書寫了」云々という奥書があり、智仁親王の書写本。『連歌貴重文献集成 第三集』に、その影印と湯之上早苗氏による解説を収め、また、古典文庫『宗砌連歌論集』には、池田重氏による翻刻と校合を収む。

2、松平文庫蔵本（一四〇—三九）

袋綴一冊。縦二七・七センチ、横二〇・四センチ。表紙左肩の題簽に、

百首和歌 文旨 紹巴 昌叱 宗祇消息

とあり、内題はない。端書に、

天正十一年初冬丹後之主幽齋長岡六郎大輔殿百首之詠拝見之刻綴之者也

とある。墨付二十丁。田舎状は、そのうち六丁。巻末には、「七月十五日」以下、「右一冊にて可有御分別候」まで桂宮本と同文の奥書がある。本文は桂宮本に最も近い関係にある。

3、京都大学附属図書館蔵谷村文庫本（4.24、イ.1）

袋綴一冊。縦二二・五センチ、横一六・一センチ。仮表紙。外題も内題もなく、巻末に、「七月十五日」以下、松

平文庫本と同じ奥書を有する。本文は、桂宮本との間に、多少の異同がある。江戸初期写本。

4、大阪天満宮文庫蔵本（れ11、一）

袋綴一冊。縦一九・九センチ、横一四センチ。『一紙品定』その他と合綴。合綴本はすべて同筆。江戸初期の写本。「一、此裏重宝候」以下の部分を欠き、巻末に、「宗砌田舎への状也、奥略之」とだけある。周桂自筆本を紹巴が永禄二年に書写し、それをさらに山内三郎右衛門尉直氏が書写した本。本文は桂宮本との間に多少の異同がある。

5、野坂元定氏蔵本

袋綴一冊。縦二四・三センチ、横一九・五センチ。外題「宗砌返札」、内題「宗砌返札也」。室町末期写本。本文

は、桂宮本との間にはなほだしい相違があり、他の四本とは系統を異にするもののようである。この写本は、池田重氏によって古典文庫『宗砌連歌論集』に翻刻されており、この解説もそれに依った。

密 伝 抄

〔内容・成立〕 てにはについて説いてある部分と、善阿とその門弟、救済とその門弟など鎌倉末期から南北朝期にかけて活躍していた連歌作家について記してある部分と、連歌の付け方を例句をあげて示した部分とから成っているが、この三者が整然と示されているわけではなく、入り雑じっていて、相互にうまく接続しない部分があるのは、本書の親本に錯簡があつたためだと考えられる。

本書の内容のうち、てにはに関する記事と例句をあげて付け方の呼吸を示した部分とは、文明十四年成立の『塵荊鈔』巻五のうちに、ほぼ同様の内容のものを見出すことができるし、善阿以下の連歌作家に関する記事は、室町初期成立と考えられる、『和歌集心鉢抄抽肝要』の記事と一致する点が多く、また、その例句に限っていえば、前記『塵荊鈔』巻五の記事とも大体において一致する。ただし、『塵荊鈔』の場合は、大体において例句の数が少ないが、これは同一の資料に依りながら、『塵荊鈔』において省略して写したために生じた相違と考えられる。

このように見てくると、本書は宗砌が新しく著作したものではなく、その先達から相伝した書である可能性が強くなるが、本書の卷末に、

是は一色殿に周阿が口伝申候き時の便節被罷向候忠に相伝仕候也 (使か) 口伝のしるしに御遊行十三代御前にて、七夕に、

袖の墨あらひてはしの天の川

とあるのに依れば、周阿相伝の書ということになる。この周阿に関して、金子金治郎氏は、『文献集成』の解説にお

いて、「救済門人の周阿でなく、その息常松であろうと思う。遊行十三代は応永二十四年寂の尊明底阿であるからである」と述べておられる。周阿の子の常松が、二代目の周阿を名乗ったかどうかについて確証はないが、その可能性は強いといえる。この周阿から宗砌が直接相伝したのではなく、間に梵灯が介在したと想定するほうが妥当のようだとする金子氏の説も首肯できるものがある。

〔諸本〕 京都大学国語学国文学研究室蔵本が、唯一の伝本である。室町末期の写本であるが、虫損のために判読の困難な部分が所々にあり、その親本に錯簡があったとみえて、もとの形を推定することも困難である。ただし、『塵荆鈔』巻五との比較において、錯簡を訂正できる部分もいくらかはある。『連歌貴重文献集成 第三集』に、その影印と解説を収めてある。

砌 塵 抄

〔内容・成立〕 山名家の臣太田垣忠説が、その同僚である高山宗砌に師事して、つね日ごろ受けていた教えを、一書にまとめて記したものの。「連歌は心より取寄るを第一とし、寄合にて付を第二とす」以下、付合・てにをは・連歌用語に関する事など、三十二項目から成る。

忠説は十七歳の時に上洛して間もなく宗砌に師事し、享徳三年（一四五四）十一月、その主君山名持豊が將軍義政の怒りにふれて但馬に退隠した際、宗砌などとともに同行したと考えられるが、宗砌はその翌年の正月に没しているから、師事したのも、それまでの期間である。本書がいつまとめられたか明らかでないが、宗砌没後相当年月を経てのちの著作と考えられる。なお、忠説は文明八年（一四七六）夏、何人百韻を独吟して、それに自注を加えている。

〔諸本〕

1、和中文庫蔵本

袋綴一冊。表紙左肩題簽に、「宗祇連歌書」とある。前半は『長六文』、後半は『砌塵抄』から成る。本文の第一行に、「宗砌塵抄」と内題がある。本文は虫損が多く解説の困難な部分が数か所ある。江戸中期写本。本書の底本に使用。国文学研究資料館蔵の写真複製による。

2、大東急記念文庫蔵本

『連歌諸抄』のうち。袋綴一冊。縦二二・一センチ、横一八・五センチ。連歌執筆作法・連歌不好詞等・宗祇伝抄と合綴。内題はなく、最初に、

予は年久田舎に住居候て、聞とし聞事とは田夫野人のさゝづり、見るとしみる事とは畋獵漁捕のしわざのみなりしを、たのみたてまつりし人の名によりて、十有七歳の春の比、花の都にのぼり侍ぬ。夫敷嶋の道に入人をば、目に見えぬ鬼神も哀とたけき物武の心もやはらぐよしを伝聞て、いかにもして、道の哀にふかく教の心ざし浅からざらん人に近付たてまつりて、かたの様な事をも伺みばやとねがひ侍る処に、其比高山の宗砌と云人有て、世こぞりて此道をまなぶ。此人の故を聞に、和歌の道は松月和尚の弟子として、定家家隆の旧言をうつすのみならず、連歌の道におひては、救済周阿が趣講にも越たりとなん申あへり。幸傍輩なる人なれば、不斷に庭訓をうけたてまつる。葛城山のたかき心を伺ことは、浅羽野のあさき言の種と成事もやとしたひ侍て、をり／＼の塵を書集めて砌塵抄と名付侍なり。

忠説在判

とあつて、本文に移り、卷末に、

砌塵抄 永禄七年四月廿八日

垂槐（花押）

とある。徳大寺公維自筆本。和中文庫本とは別系統の写本で、両者の間に本文の異同が多い。『連歌貴重文献集成第三集』に、その影印と解説を収めてある。

3、太田武夫氏蔵本

袋綴一冊。縦二二・六センチ、横一五・四センチ。外題・内題とも、「宗砌塵抄」。和中文庫本と同系統の写本。虫損のため解読の困難な部分があるが、和中文庫本の欠を補うのに貴重な写本である。序文も奥書もない。江戸中期の写本。

かたはし

〔内容・成立〕 本歌・本説の取り方、付合・詞の良し悪し、百韻の進行のさせ方、学習のし方その他、初心者留意すべき事について記してある。成立年次を示す奥書も、内部徴証も見出せないで、いつ成立したかは、不明というほかはない。ただし、「小児のためと承間、片はし書つけて見せ侍り」とあるので、求めに応じて小児のために書き記したものであることが分る。

〔諸本〕 底本および校合本につき、簡単な解説を加えておく。

1、東京大学総合図書館蔵本（E³²、六二）

『東京大学総合図書館連歌俳諧書目録』に、「承知連歌論」と仮題で掲げているもの。袋綴一冊。縦二五・八センチ、横一八・六センチ。表紙中央左寄りに、「連歌師承知筆」とある。第一丁表に、青洲文庫の印があり、第二丁表から本文。内題はない。巻末に、

天正六年四月廿三日書写之

五十四歳
承知（花押）

とあり、天正六年、承知自筆の写本。承知は周桂の門弟で、天文十一年（一五四二）六月十一日何木百韻に一座、以後、連歌会に時折顔を見せている。本書の底本に使用。

2、天理図書館蔵本（れ一・二一一七）

袋綴一冊。縦二〇・五センチ、横一三・九センチ。仮表紙の中央短冊型題簽に、

片 端

專順作

と記す。第一丁表から本文。内題はない。巻末に、「明応四年六月日」とある。江戸初期の写本。

3、神宮文庫蔵本（三、二〇五七）

袋綴一冊。縦二二・七センチ、横一六・三センチ。表紙左肩題簽に、

片端并去嫌歌

宗 砌

とあり、第二丁表から本文。本文の第一行に「片端」とある。巻末に、「春揚坊專順作」とあり、第九丁表まで。第十丁表から『去嫌歌』。江戸初期写本。

4、竜谷大学附属図書館蔵本（^{911,3}35）

袋綴一冊。縦二八センチ、横二一センチ。表紙左肩に、うちつけ書きに、「連歌秘伝集」、本文の前に、「片端」と記す。十体・於連歌秘伝集その他と合綴。巻末に、

文明十一年十月十三日

專順在判 春揚坊專順作

と一行に記す。江戸初期写本。本文は、神宮文庫本と脱文を共有し、相当近い関係にあるが、それぞれ独自の脱文を有する。

5、書陵部蔵桂宮本（桂、六八）

袋綴一冊。縦一四センチ、横二〇・一センチ。表紙左肩に、うちつけ書きで、「用心抄」、第二丁表中央には、「用心抄兼載等撰之」と記す。第二丁表から本文。執筆事・連歌故実事その他と合綴。第十六丁表の中ほどに、宗祇初心抄の本文に引き続き、「片端」と内題があつて本文を記す。巻末に奥書はない。江戸初期写本。数か所に脱文があり、

又順序を異にする部分がある。

6、京都大学国語学国文学研究室蔵本（コ、Gb、12）

袋綴一冊。縦一三・三センチ、横二一センチ。表紙左肩題簽に、「かたはし」とあるが後代の筆跡。第二丁表から本文。本文の最初に、「かたはし」とある。巻末に、

法印專順作分也

文明十三年六月日

宗可

永祿九年三月十二日書

とある。室町末期写本。

筆のすさび

〔内容・構成〕 最初に、保元・平治の乱以後の数々の国の乱れを回顧し、それらの内乱とくらべてみても比類を絶する応仁の大乱のため都が焼土と化したことを述べ、そのため遂に南都に下向し、つれづれのあまりに本書を著作するに至ったいきさつを記して序とし、ついで救済（十三句）良基（七句）良阿（七句）周阿（三句）頓阿（三句）冷泉為相・六条有房・十仏・梶井宮尊胤・敬心・順覚（一句）宗砌（二句）の句総計四十一句のそれぞれを鑑賞批評した上で、同じ前句に兼良自身が試みた付句を書き添えている。巻末には、文明元年十二月の頃、この著作を後花園法皇の覧覧に供した折にたまわった長歌と反歌を載せ、その後、その旨を書き記して跋としている。

〔成立〕 巻末近く、「抑我君、一昨年（の秋）の比より本宮を去らせ給て、都ちかき所におはしませしけれど」とあるが、大乱の勃発により、土御門天皇と後花園上皇が、一条大路の北にある室町第に移ったのは、応仁元年八月二十三日の事であるから、執筆を完了した時点は文明元年（応仁三年）である。

〔諸本〕 底本および校合本について簡単な解説を加えておく。

1、書陵部蔵桂宮本（桂、五四）